皮内痘瘡豫防注射 *Karl Kundratitz.*

(Monatschrift f. Kinderheilk. 54. Bd. Heft 4. 1932)

著者は一九二〇—一九二一に *Prof. Leiner* と共に *Rudifchmacher* の根本思想（稀釋痘苗の注射）に從て、皮内種痘を試み成功した。氏の方法に依れば膿泡形成の代りに浸潤を作るのであるが、順調の經過を取らしめる爲には痘苗の稀釋度合が最も肝要である。著者は現今の所、無菌淨水又は生理的食鹽水で一五〇倍に稀釋したものを用ひて居る。その稀釋法としては痘苗の一滴を必要なる稀釋液におとすか、又は Tuberculin 稀釋法の如くするのである。而してその〇・一 ccm. を皮内に注射する。

本法の長所とする所は、

（一）、膿泡形成を避けうる事、且膿泡内容の撒布による二次的障碍を防止し得ること、（二）、種痘反應の經過の間に於ける接種場處の二次的傳染の不可能なること、（三）、數度の醜き瘢痕形成の防止。（四）、一般に寛和なる輕度の種痘經過、等である。

皮膚種痘の場合の禁忌は斯くの如き長所により大いに制限され得る。氏の法は多くの小兒科醫により同意を得て大いに推薦さるゝに到つた。

皮内種痘による防禦力の持續期間を皮膚の再種痘により檢せるに、著者の經驗によれば五—七年前に唯一つの皮内注射せる子供に於いて尙七九・八%に於いて種々の程度に皮膚の免疫を示した。現今あらゆる方面より寛和なる種痘の經過を要求されてをり、之の要求を充たし得るものは皮内種痘であると述べて居る。（中村抄）

惡性貧血に對するカムポロン療法

柴田經一郎（臨牀と治療一卷一號）

一九三〇年、五瓦の生肝から製出されたカムポロン（二瓩）は、三〇〇乃至六〇〇瓦の生肝を、經口的に攝取すると等しい効力ありて副作用なし。之を毎日一筒（二瓩）筋肉内に注射し、血液像が正常になるまで續ける。六週—十二週で正常値に達す。漸次注射回數を一週に三回、二回、一回、とし止める。後は、血液像を檢しては、一二週間注射する。一回注射すると、翌日から全身症狀が著明によくなり、注射を中止しても二週間は効が續いてゐる。エオジン嗜好細胞の增加を

來すことも著明の事である。（中村抄）

鼠型黄疸出血性「スピロヘータ」株の型問題に就て

北岡正見（日本傳染病學會雜誌第六卷第十二號）

鼠系黄疸出血性スピロヘータは、その家兎免疫血清に難溶性のものありて凝集價低き事稀ならず。又人系「黄出ス」家兎免疫血清並に「黄出ス」病恢復期患者血清に對しても凝集價低きものあるも人系「黄出ス」株は鼠系「黄出ス」株免疫血清に依り同樣に高度に凝集せらる。

免疫血清中の培養試驗、リーケンベルグ氏現象に於て人系、鼠系「黄出ス」は全く同一種にして、鼠系「黄出ス」株間中に多少の差異を示す事あるも同一種と認む。パイフェル氏試驗に於て免疫血清一蛭を使用する時は明に鼠系「黄出ス」株は同一なるを證明し得たり。

從つて治療血清製造には人系「黄出ス」たると、鼠系「黄出ス」たるとを問はず一株を用ふれば可にして多價血清たるを要せず。（板抄）

家鼠の黄疸出血性「スピロヘータ」保有率とリーケンベルク氏現象に就て

北岡、井上、若菜（日本傳染病學會雜誌第六卷第十號）

東京帝國大學構内並に其附近及東京警察病院より捕獲せる家鼠一二一匹を鏡檢並に海猪接種リ氏現象に依り三一・四%に「黄出ス」を證明せり。溝鼠、黑溝鼠に四二・二%、埃及鼠に二一・四%、熊鼠に一三・三%に證明せり。家鼠は老ひたるもの程保有率高し。

海猪接種による陽性率は二三・八%、尿腎の鏡檢陽性は二七・二%、リ氏現象陽性は三二・一%なり。リ氏現象陽性に依る時は最も大きく、動物罹患に依る時は最も少さく現はる。

リ氏現象陽性のものに必ずしも「黄ス」を證明し得ず。而してリ氏現象陽性者中海猪接種に依り七二%、鏡檢上八一・二%に「黄ス」を證明したり。又リ氏現象陰性なりし家鼠に於て尚一・五%に「黄ス」を鏡檢又は海猪接種試驗に依り證明せり。

リ氏現象にて秋疫A、B型、並にフェブリス株の存在を證明し得ず。「水ス」には一三・二%陽性なり。